

慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	海から山へ：日本海沿岸における二峰の山をめぐって
Sub Title	The Worship of the mountains from the Japan Sea
Author	那波, 克哉(Naba, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海から山へ

—日本海沿岸における二峰の山をめぐつて—

那波
克哉

一はじめに

『日本書紀』の天孫降臨条については、最近では「天浮橋」や「浮渚在平處」の解釈^①や、「櫛日」と韓国語との共通性^②が説かれている。しかし、この条の「二上」という用語に焦点をあてたものは少ない。神が山に下りてくる際、なぜ「二上」を目指すのか、本稿では「二上」である意味に注目しながら、垂直方向と水平方向とに分けられる神来臨の観念について考察していきたい。天孫降臨条における「二上」について、実際の用例は二例見ることができる。

時に高皇產靈尊、真床追衾を以ちて、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて降りまさしむ。皇孫乃ち天磐座を離ち、〔天磐座、此には阿麻能以簸矩羅と云ふ。〕且天八重雲を排分け、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穗峰に天降ります。既にして皇孫の遊行す状は、櫛日の二上の天浮橋より、浮渚在平處に立たして、「立於浮渚在平處、此

には羽企爾磨梨陀毘邏而陀陀志と云ふ。」脅穴の空国を、頓丘より覓国ぎ行去り、「頓丘、此には毘陀鳥と云ふ。覓國、此には矩貳磨儀と云ふ。行去、此には騰褒屢と云ふ。」吾田の長屋の笠狭の碁に到ります。

（『日本書紀』第九段 天孫降臨条 正文）

（（ ）は割注。以下も同じ。）

高皇產靈尊、真床覆衾を以ちて、天津彦國光彥火瓊瓈杵尊に裹せまつり、則ち天磐戸を引開け、天八重雲を排分け
て、降し奉る。時に大伴連が遠祖天忍日命、来目部が遠祖天穗津大来目を帥る、背には天磐輶を負ひ、臂には稜威
の高鞆を著け、手には天梶弓・天羽羽矢を捉り、及八目鳴鏑を副持ち、又頭槌剣を帶きて、天孫の前に立つ。遊行
き降來り、日向の襲の高千穂の穗日の一上峰の天浮橋に到りて、浮渚在之平地に立たし、脅穴の空国を、頓丘より
覓国ぎ行去り、吾田の長屋の笠狭の御碁に到ります。

（『日本書紀』第九段 天孫降臨条 一書第四）

どちらも高皇產靈尊が降り立つに際して、まず目指す対象というものが高千穂であり、一書第四では「一上峰」とある
ところから、高千穂の峰の形状が「一上」であるという認識があつたと言える。

一上山という名称ではなくとも、一峰を持つ山というものが信仰の対象になつていることが多い。大和一上山、越中
二上山は『万葉集』において有名だが、筑波山、弥彦山等も集中には既に神格化された信仰を見る事ができる（後述）。
出雲地方においては、かむなびと称される聖山が『出雲國風土記』に記載されており、緩い鞍部を持つ特徴がある。また、前に見たように九州では高千穂も山頂が一上であるという認識がされているだけではなく、沖縄における聖所であ

る御嶽の中でも、独特な形狀の山が信仰の対象となつてゐる。例を挙げると、本島最北部にある辺戸御嶽や、琉球王府にとつての最重要聖地でもある南部知念村の斎場御嶽、本部半島にある嘉津宇嶽等である。沖縄におけるこれらの聖地は二上峰といふわけではないが、「ゴツゴツとした山頂を持ち、海上からもすぐにそれとわかる特徴的な形狀をしている。これには地域ごとの特徴もあり、また沖縄に関しては、資料として扱える文献の時代が中世から近世のものしかないので、比較の対象にはしにくいが、沖縄を含めた日本各地に二上を持つ山というものを信仰する共通の認識があつたとも考えられる。このように「二上」に關わる聖山を見ていくことによつて、天孫降臨条に見られたような神の來臨の方向性に対する日本人の意識が浮かび上がつてくると考える。

池田彌三郎はその最晩年に「海神山神論の計劃⁽³⁾」を構想した。その中で「神の出現」として天上からの神の來臨の他に「よります神」について考察しなければならないとした。山上にたどり着く神と、海上からよる神との考察である。その中の23番目の項目として、

中臣寿詞に伝えられた大和の二上山。同じ地名の「二上山の賦」が越中の二上山について、大伴家持が長歌を制作。創作動機は單なる山および山の神に対する儀礼歌にすぎないが、それだけに、文学以前の信仰伝承として検討をする。

（「海神山神論の計劃」）

と早くも「二上」の用語に注目している。近藤健史はこれら二つの二上山だけではなく、筑波山や日向高千穂峰など山頂が二上の形狀を持つ特異な山にも共通の古代的觀念があるとしたが⁽⁴⁾、なぜ二峰を有する山には神が坐すのか。文学以

前の信仰伝承として二上山に対して、人々がどのような思いを寄せていたのか、二上山に対する信仰心はどのような背景を元に成り立っているのかを考えることが「海神山神論」の一つの側面を照らすことになり、神来臨の方向性も見直すことになると考える。そこで今回は特に日本海側の信仰に絞って見ていただきたい。

二 越中二上山

洪谿の 二上山に 鷺そ子産むといふ 翳にも 君がみ為に 鷺そ子産むといふ

(卷十六・三八八二)

この歌は、『万葉集』卷十六・三八八二番歌で、題詞に「越中国歌四首」とあるうちの一首目である。旋頭歌体であり、民謡的な色彩が有ることは土屋私注、伊藤釂注などにもある通りで、古謡と見ることができ、家持以前から二上山が民衆から意識されていたことが窺えるだろう。次に、

二上山の賦一首〔この山は射水郡にあり〕

射水川 い行き巡れる 玉櫛筈 二上山は 春花の 咲ける盛りに 秋の葉の にほへる時に 出で立ちて 振り
放け見れば 神からや そこば貴き 山からや 見が欲しからむ 皇神の 裾廻の山の 洪谿の 峠の荒磯に 朝
なぎに 寄する白波 夕なぎに 満ち来る潮の いや増しに 絶ゆることなく 古ゆ 今の現に かくしこそ 見
る人ごとに かけてしのはめ

(卷十七・三九八五)

」で見られる山と川とのセットの表現について、池田は『万葉集』中に「帶にせる」川があると表現されるみもろ山やかむなび山には「せ」と敬意を表す言い回しがあり、神聖な山にはその周りを廻る川があるとし、このような川があることが「かむなび」の特徴であると指摘している。⁽⁵⁾ 越中二上山に関して見ると、山麓の周りを蛇行するように流れている小矢部川（集中の射水川）は現在も二上山の裾を洗っているが、その射水川が「い行き廻れる」と表現され「皇神の裾廻の山」としてその領域を支配する二上山の神性が詠されており、かむなびと、この越中二上山には共通した観念が窺えるのである。

他にも、『万葉集』にでてくるかむなびには、

みもろの 神奈備山に 五百枝さし しじに生ひたる つがの木の いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく……

（卷三・三一四）

というように、梅の木がその永遠性を引き出すために詠われるが、越中二上山においても、

かき数ふ 二上山に 神さびて 立てるつがの木 本も枝も 同じ常磐に はしきよし…… （卷一七・四〇〇六）

とある。越中二上山は大伴家持に愛され詠まれたために大和の聖山に対する表現が援用されているとも見られるが、最初に挙げた三八八二番歌が古謡と見られることや、この四〇〇六番歌に見られるように『万葉集』の時代には既に二上

山は「神さびて」おり、池田の「文学以前の信仰伝承」を検討すべきという指摘の通り、家持以前から越中二上山が信仰されていたことは疑いがない。このように一上山と大和のかむなびとの間には古い信仰の跡が窺えるが、かむなびといふものそれ 자체は、出雲と関わりが深いとされる。出雲国造がその新任の際に大和朝廷へ寿詞を奏上するという慣例があるが、それが『延喜式』に「出雲国造神賀詞」として載つている。

すなはち大なるものの命の申したまはく、『皇御孫の命の靜まりまさむ大倭の國』と申して、己命の和魂を八咫の鏡に取り託けて、倭の大物主くしみかたまの命と名を称へて、大御和の神なびに坐せ、己命の御子あぢすき高ひこねの命の御魂を、葛木の鴨の神なびに坐せ、事代主の命の御魂をうなてに坐せ、かやなるみの命の御魂を飛鳥の神なびに坐せて、皇孫の命の近き守神と貢り置きて、八百丹杵築の宮に静まりましき。

（岩波日本古典文学大系『古事記 祝詞』より）

皇孫の近き守神として、出雲の神々が大和にそれぞれ鎮められたとすることが主張されている。これに素直に従うのであれば、かむなびという聖山の信仰の元を探るにはまず出雲のかむなびを見ていかなければならないだろう。次章では、出雲かむなびの信仰にはどのような要素があるのか、古代文献と土地の民俗により考えてみたい。

三 出雲かむなび

『出雲国風土記』には「神名樋」もしくは「神名火」と表記される四つの「かむなび山」が登場する。それぞれのか

むなび山の記述を見ていく。

1 意宇郡のかむなび

神名樋野。郡家の西北三里一百廿九歩なり。高さ八十丈、周り六里卅二歩なり。「東に松あり。三方並びに茅あり。」

(『出雲國風土記』意宇郡)

意宇郡の神名樋野は、現在の松江市山代町の茶臼山に比定されており、その山容は中央に鞍部をもつた「上山」の形である。丘に近い小山で、風土記時代の国府のすぐ北西に位置する。また、この山の南麓には真名井神社と真名井の滝がある。宮澤明久は、

滝は古来神聖な水として出雲国造家の祭事に使用されており、……の滝の西方一〇〇メートルのところに『雲陽誌』にいう「聖岩」があり、神火を取る場所であったと記されている。麓に居を構えた出雲国造家の重要な祭儀である神火神水の祭儀と深く関わりがあると考えられる。

としているが、真名井神社というのは、「風土記」中にも『延喜式』にも載っている社であり、かむなびと水（神聖なる井）との関わりを印象付ける。実は越中二上山南麓には射水神社が鎮座し、現在も築山神事が行われることで名高いが、その際、射水神社内の天の真名井において祝詞が奏上される。二上山もかむなび山も水との関わりというものが密接であることが窺えるのである。また、越中二上山や大和かむなびに見た「帶にせる川」として、この神名樋野である

茶臼山の南には意宇川が流れている。これら、形状や、「帶にせる川」の存在、聖水信仰等、二上山と似た信仰があることが窺えるだろう。

また、『出雲国風土記』中にはこのような記述がある。

忌部の神戸。郡家の正西廿一里二百六十歩なり。國の造、神吉詞奏しに、朝廷に参向ふ時に、御沐の忌里なり。故れ、忌部と云ふ。すなはち川の辺に出湯あり。出湯の在る所、海陸を兼ねたり。

故れ、國の造神吉事奏しに、朝廷に参向かふ時に、その水活れ出でて用る初むるなり。

(『出雲国風土記』意宇郡 忌部神戸)

(『出雲国風土記』仁多郡 三沢郷)

先にも出雲国造が新任の時に大和朝廷に寿詞を奏上すると書いたが、その折に二度、禊ぎをすることが記されている。仁多郡三沢郷では沢の水であるが、意宇郡では、その場所は「海陸を兼ねたり」と記されている。今の玉造のあたりだと考えられているが、宍道湖に面した場所で国造が禊ぎをしていたことが窺える。現在でも、神職に限らず、一般の人々も禊ぎをする習俗がある。筆者が真名井神社を参詣したおり、拝殿の賽銭箱の上にお盆が置いてあり、その上に海藻がいくつもあった。十月十七日の祭日を前に、氏子の方々が海で禊ぎをし、その証として神葉(ジンバ)と呼ぶこの海藻をお供えするのだという。しかもその神葉を採りに行くのに、十五キロメートルほど北にある日本海側に面した八束郡鹿島町まで採りに行くと宮司は言う。海からは多少距離のある、宍道湖と中海との間にあるこの土地に、かむな

び山と海に関わる信仰が存していると見ることができよう。また、この茶臼山の二キロメートルほど南には雨乞山という山がある。現在の民俗など細かな話は分らなかつたが、雨乞いの要素もこのかむなび山周辺は関わつてくるようである。これは楯縫郡のかむなびで触れる。

2 秋鹿郡のかむなび

神名火山。郡家の東北九里冊歩なり。高さ二百卅丈、周り一十四里なり。謂はゆる佐太の大神の社は、すなはち彼の山の下なり。

『出雲国風土記』秋鹿郡

これは現在の朝日山だとされている。ここも鞍部を持つ特徴的な形をした山である。ここにおいてこの聖なる山と神との関係が少しだけ窺える。この佐太大神とは、

加賀の郷。郡家の北西廿四里一百六十歩なり。佐田の大神、生れまししなり。御祖の神魂の命の御子、支佐加比売の命、「闇き島屋なるかも」と詔りたまひて、金弓以て射給ふ時に、光加加明きぬ。故れ、加加と云ふ。

『出雲国風土記』鳴根郡加賀郷

加賀の神埼。すなはち窟あり。高さ一十丈許り、周り五百一歩許りなり。東と西と北は通ふ。「謂はゆる佐太の大神の產生れませる処なり。產生れまさむ時に臨みて、弓箭亡せ坐しき。その時、御祖神魂の命の御子、枳佐加比売の命、願ぎたまひしく、「吾が御子、麻須羅神の御子に坐さば、亡せし弓箭出で来」と願ぎ坐しき。その時、角の

弓箭、水の隨に流れ出でき。その時、取らして詔りたまはく、「此は非ぬ弓箭そ」と詔りたまひて、擲げ廃て給ひき。又金の弓箭流れ出で來。すなはち待取らし坐して、「闇鬱き窟なるかも」と詔りたまひて、射通し坐しき。すなはち御祖支佐加比売の命の社、此處に坐す。今の人、是の窟の辺を行く時に、必ず声磅礪して行く。若し密かに行かば、神現れて、飄風起り、行く船は必ず覆へる。」

『出雲國風土記』鳴根郡加賀神埼

とある佐太の大神と同じだろう。この記述によれば、生まれた場所が現在も賽の河原として有名な加賀の潛戸であり、また母神は支佐加比売命という貝の神であつて、秋鹿郡神名火山の麓に鎮座する神とはいえ、海と関わりの深い神であることが窺える。

この話に関して、吉井巌は日光感精説話としての一面を指摘しているが⁽⁷⁾、日光感精説話と見られる『古事記』（中巻応神天皇）の阿具奴摩で女が赤玉を産んだ話には、朝鮮半島に類似の話があるなど⁽⁸⁾、大陸に特徴的なものである。この加賀神埼条について見ると、まず、弓箭における誓約が行なわれる。角の弓箭ではなく金の弓箭が流れ来た為に、麻須羅神の子としての佐太の大神が産まれ得たと考える。角であるより金の弓箭であることが重要であつて、それ自体が太陽光線を象徴しているとも考えられるが、その金の弓箭によつて暗かつた窟が射通され、太陽光線が差し込んだことによつて大神を生むことができたのだから日光感精説話としての性質を備えていると言えるだろう。また、対馬の天道信仰との共通性⁽⁹⁾から、大陸、対馬、出雲とも結びつく海の民が持ち伝えた伝承と神がこの加賀の潜戸に密接に結びついていると考えられ、その神の坐す秋鹿郡神名火山の信仰というのも海の民に大きく影響されていると見ることができるだろう。そして、このかむなび山にも先ほどの意宇郡のかむなびと同様に禊ぎの習俗が絡んでくる。「彼の山の下なり」

とされる佐太神社に入つて正面、拝殿の右側に、木製の鳥居の形をした小さな枠にたくさんの海藻がかけられている。真名井神社の辺りでは「ジンバ」というと書いたが、ここでの聞き取りによれば「モバ」という。おそらく「藻葉」であろうが、これを意宇郡の時と同様に、すぐ北の日本海側、古浦の方へひつて、禊ぎを行つた証に採つてくるといふ。この土地では、現在は海で禊ぎをするのも大変なので、この「モバ」をとり、同時に竹の筒に海水を入れて、地元へ帰る。そして、佐太神社の近くの「マスミの池」で禊ぎをして、その後、神社へ採つてきた「モバ」と海水の入つた竹筒をお供えにいくのだそうだ。これはケガレのあつた時のみではなく、正月の節目などにも行なわれたという。⁽¹⁵⁾

また、十月は出雲大社の神在祭で有名だが、その集まつた神々をお送りするのに、この佐太神社後方の神目山（かんのめやま）から海に向かつてお送りする。このかむなび山には、海で生まれた神様が鎮座し、禊ぎの習俗の残る土地でもあつて、神を海からお送りする祭式も行なわれる。意宇郡茶臼山以上に海とのつながりが深いことが窺えるのである。

3 横縫郡のかむなび

神名樋山。郡家の東北六里一百六十歩なり。高さ一百廿丈五尺、周り廿一里一百八十歩なり。嵬の西に石神あり。高さ一丈、周り一丈なり。往の側に小き石神百余許り在り。古老伝へて云はく、阿遲須枳高日子の命の后、天の御棍日女の命、多具の村に来坐して多伎都比古の命を産み給ひき。その時、教し詔りたまはく、「汝が命の御祖の尚く泣きたまへ。生きむと欲さば、此處宣し」とのりたまひき。謂はゆる石神は、すなはちはれ、多伎都比古の命の御託なり。旱に当りて雨を乞ふ時は、必ず零らしめたまふ。

（『出雲国風土記』 横縫郡）

楯縫郡の神名樋山は、現在の大船山とされる。「周り廿一里」とはかなり広いが、峰続きですぐ北東の鍋池山も合わされて見てみるとこの記事とほぼ距離も違わずに、また、二上山の形として綺麗な山容を示す。多伎都比古命というのは他に例がない。『古事記』上巻のアマテラスとスサノヲの誓約の段に、

故、其の、先づ生める神、多紀理毘売命は、胸形の奥津宮に坐す。次に、市寸島比売命は、胸形の中津宮に坐す。

次に、田寸津比売命は、胸形の辺津宮に坐す。此の三柱の神は、胸形君等が以ちいつく三前の大神ぞ。故、此の、後に生める五柱の子の中に、天菩比命の子、建比良鳥命、「此は、出雲国造・無耶志国造・上菟上国造・伊自牟国造・津島県直・遠江国造等が祖ぞ。」

(『古事記』上巻 誓約)

とある多紀理毘売命と関係があることは想像される。多紀理毘卖命は海の民である宗像氏の祀る神であつて、また、母神の名が天の御梶日女神であつて「梶」と関わるところから見ても、やはりこのかむなび山の神も海と少なからず関係がありそうである。また「旱に当りて雨を乞ふ時は、必ず零らしめたまふ」とあり、この山の信仰に、雨乞いの要素があつたことを考えさせる。

「神奈備山とその祭祀」⁽¹⁾には詳細な記録があるが、それによると三つの地点に祭祀跡が確認できるようで、一つ目の地点には多久川支流の小渓流の中の小さな滝とその周囲の急斜面で、古墳時代中期後半から後期初頭の土師器の破片が採集されており、二つ目には、「岩船」と呼ばれる巨岩の周囲の岩陰三ヶ所で古墳時代後期の土器片等が見つかっている。三つ目には、多久川の最上流部にある「鳥帽子岩」の直下の一〇メートルほどのそり立つ崖面の下で、小さな滝

のそばに古墳時代後期の土師器片が見つかっている。これらの岩が石神とも見ることができそうだが、とにかく滝や岩陰で祭祀をしていたということは明らかであろう。このような古墳時代の岩陰祭祀と似た原始的な祭祀の要素があるのが、海の正倉院と言われるほど資料が多く発見される福岡県沖ノ島である。多伎都比古命との関係が考えられる宗像三神のうちの多紀理毘売命が、胸形の奥津宮に坐すという記述を前にも見たが、その奥つ宮が沖ノ島であって、少なからず出雲地方と九州地方につながりがあつたと考える。この沖ノ島は、調査報告⁽¹²⁾によると五カ所の遺跡において、岩上祭祀の形態が見られ、十二カ所の遺跡に関する岩陰祭祀の形態が見られるという。岩陰祭祀に関しては五世紀後半のもとのと見られるようで、神の名に共通点が見られ、祭祀の行われた時代と方法もこの楯縫郡のかむなびと沖ノ島には似た部分が見られる。その背後にはやはり海のつながりというものが不可欠であったであろう。

4 出雲郡のかむなび

神名火山。郡家の東南三里一百五十歩なり。高さ一百七十五丈、周り一十五里六十歩なり。曾支能夜の社に坐す、伎比佐加美高日子の命の社、すなはちこの山の巖に在り。故れ、神名火山と云ふ。
（『出雲国風土記』出雲郡）

出雲郡の神名火山は仏經山に比定されている。この神については他に例がないが、ここも楯縫郡のものと同様に瀧音能⁽¹³⁾とは「現に幾つかの岩座がある」としている。また、この山と社との関係について池田は、曾支能夜の社が山麓にあつて、山頂に神が鎮まつてゐるというところから、麓の社は本殿を必要としない拝殿のみという三輪の大神神社と同じ形だつたのではないかとした。⁽¹⁴⁾ 山自体が神体であるという信仰の古い段階の要素をもつてていることも「かむなび」の特徴

ではないだろうか。

地形的に見ると、この仏経山は東から続く山塊の端にあたり、宍道湖対岸から見てもよく目立つし、遙か東岸である松江市の宍道湖大橋からでも鞍部を持つた二上の山頂が綺麗に見える山である。

また、この地域は地形の変動が激しかった土地で、その変化については「中海・宍道湖の地史と環境変化⁽⁵⁾」に詳しいが、それによると、風土記編纂の時代にはもともと斐伊川が今のように宍道湖には流れ込んでおらず、西に流れ、神門水海（今の神西湖）に流れてから西の海に注いでいた。だから今のように、仏経山の北側は河川の土砂流入による平野ができていたわけではなく、宍道湖上であつたため、この仏経山も湖上から見るとさらに美しい山容を示していたであろう。

ここまで見たかむなびの信仰の要素をまとめたい。

一上の形状であること

神聖な水と関わること

海での禊と関わること

海と関わりの深い神が鎮座していること

雨乞いとも関わること

山そのものが神体であること（原始的な信仰とも考えられる）

このように出雲世界におけるかむなび山というものは古墳時代には既に信仰されており、特に海の民と関わりが深い」とが想像され、山と海とのつながりというものは実は密接な関係があつたと考えることができる。

四 潟を通じた交流

出雲郡のかむなびに比定されている仏經山より少し離れるが、北東には、銅鐸・銅劍が大量に見つかった神庭荒神谷遺跡が存在し、弥生時代には既に大きな勢力が附近に存在したことを窺わせる。また、この仏經山から西、「帶にせる」川である斐伊川を挟んで対岸の出雲市大津町には、四隅突出型方墳が発見された西谷古墳もある。実は出雲地方に特有なこの四隅突出型という形状のものが富山県の杉谷古墳において見つかっているのである。

富山県呉羽山の南部、富山医科大学内にある杉谷に発見された古墳で、藤田富士夫によつてその出雲文化とのつながりが指摘されているが、発掘に關しては一九七四年に「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告」⁽¹⁾としてまとめられている。このうちの杉谷4号墳が藤田の言う「四隅突出型方墳」である。出雲地方に特有なこの形状の古墳が富山県内に見つかり、古代出雲と古志との関わりが指摘されている。そのつながりにおいて、注目されるのが海上交通と天然の港湾となり得る潟の存在である。この呉羽山の西部は『万葉集』の時代には奈吳の海と呼ばれる潟が広がっていた。

奈吳の海人の 鈎する舟は 今こそば 舟棚打ちて あへて漕ぎ出め

(卷一七・三九五六)

既に家持の時代には風光明媚な景勝地となつていたが、もう一つこの地域に大きな潟があつたと想像される。

……布勢の水海に 海人舟に ま楫櫂い貫き……

(卷一七・三九九三)

奈吳の海（現在の放生津潟）から越中二上山を挟んで西側の布勢の水海（現在の十二町潟）である。実は越中二上山の周囲は潟に囲まれており、その水際沿うように二上山の周囲に桜谷古墳群・覗が森貝塚・吳羽山古墳横穴群など縄文期から古墳時代に至るまでの多くの遺跡が存在し、二上山の周囲のこの潟が人々にとっての天然の良港として機能し、古代の人々は好んでこの潟の傍に住み、海の幸・山の幸の恩恵にあずかることができ、古墳時代には海上を主とした貿易も容易であったことを想像させる。

各地の漁村で言われていることだが、古くから漁民は漁場の確認等の為に、海上から陸地の山と沿岸の目標物を重ね合わせて自位置を把握するヤマアテという技術を用いていた。土地によつてヤマダメ・ヤマタテなどと言うようであるが、日本海側にはこの対象となる山が多く存在する。森浩一は「潟と港を発掘する」において、

すでに述べた十二町潟は、海上からみると石動山や二上山を目標にすることができるし、放生津潟も、遠くは立山、近くは二上山を目ざして近づくことができる。このような港への目印となる山の多くが信仰上の靈山であることの一つの理由は、航海者たちによつてたかめられたのであろう。

と指摘しているが、港である潟をめざし、また潟に生きる人々にとつて二上山が良い目標であり、また居住地のシンボルとも成り得たと考へる。明治十八年ごろに記されたとされる『越中遊覽志』の「伏木より水見に至る沿道」には、

山の下の海中、岸を距ること壱丁ばかりのところに大巨巖、波中に突起す。これを男岩といふ。高さ六丈、周囲凡七十間ありといふ。頂上一松樹あり。幹枝偃蹇、巖上を蔽ふ。その状頗る奇古なり。入船の目標となるといふ。

とある。現在のJR氷見線雨晴駅のすぐ東、義経が雨宿りをしたという岩の先の海中に女岩、そこから伏木の港の方に目をやると男岩がある。山に対する目標物としてこの女岩・男岩が機能していたことを窺わせるのである。江戸末期から明治の話がすぐさま古代に直結するわけではないが、機械の無い時代、古くから潟に住んだ人々にとつて生活をしていくうえで、ヤマアテはなくてはならない技術であつたろう。この附近に古くから住み着き、狩猟採集漁撈生活をし、古墳を築き、国府ができるまで、この山の麓に住んだ人々の間にその恩恵に対する信仰心が生まれてきてても不思議ではない。そういう山が二上山の様な美しい山容を示していれば尚更である。二峰が一番よく見える位置を考えると、東西の潟があつたと想定される現在の氷見・射水両平野部の位置であつて、古代の人々は自分たちの港からこの山容を仰ぎ見ていたとも考えられるのである。そして『万葉集』の時代には布勢水海、奈良の海、松田江の浜、渋谷の埼、二上山など潟と二上山に関わる景色が好んで詠み込まれていくことになるのだが、そういう万葉人の心の基底には縄文期以来、人々が二上山に抱かれながら暮らしてきたという背景があつてこそあると考える。越中國府があつたとされる伏木の勝興寺附近は、二上山が近すぎて山容を臨むという位置ではない。伏木駅のすぐ南に小矢部川を渡る渡し舟が出ているが、それに乗つて対岸から見るとやつと二上山が見えるのである。官人による発見ではなく、そういう生活の蓄積があつてこそ二上山が意識され、家持の時代には聖なる山としての存在にまでなつていたのであろう。二上山麓の射水神社には船型の神輿も安置されている。二上という独特な形状の果たす機能というものが、一つには、ヤマアテと

いう生活技術と関わり合つており、その信仰といふものは海の民と深く結びついたものであるとも見ることができる。四隅突出型方墳という共通点が見られる背後には渦を通した海の民の交流があつて、美しいだけではなく、その形状からも目標としやすいという利点のある二上山に対する信仰も自然と各地に広がつていったということが想定できるのである。

五 信仰の伝播

越中二上山と出雲のかむなび山とに共通の古代的信仰を見出すことができるのは、有史以前より、海路を主とした人々の交流があつたからだと考へることができる。これは四隅突出型方墳という遺跡だけではなく、『出雲国風土記』中にもそれを裏付けるような出雲と越とのつながりが窺えるが、ここでは移住の記録と見ることのできる例のみを挙げる。

古志の郷。すなはち郡家に属く。伊弉諾の命の時に、日測川を以て池を築造りき。その時、古志の国人等、到り来て堤を為り、すなはち宿居せる所なり。故れ、古志と云ふ。

（『出雲国風土記』神門郡古志郷）
狭結の駅。郡家と同じき處なり。古志の國の佐与布と云ふ人、來り居みき。故れ、最邑と云ふ。神龜三年、字を狭結と改む。その來り居める所以は、説くこと古志の郷のごとし。

（『出雲国風土記』神門郡狭結駅）

古志の國の人々が神門郡にやつてきたことが記されている。現在、国土地理院地図で確認すると神門郡古志郷にあたる

出雲市古志町は神西湖の東にあたり、干拓や海退の起ころ前、古くは神門水海と呼ばれる大きな潟が広がっていたので、もつと水際に近い土地であつたと考えられる。『出雲国風土記』中の記述を見ると、

神門の水海。郡家の正西四里五十歩なり。周り卅五里七十四歩なり。裏にはすなはち鮎魚・鎮仁・須受枳・鰯・玄蠣あり。すなはち水海と大海との間に山あり。長さ廿二里二百卅四歩、広さ三里なり。此は意美豆努の命の国引き坐しし時の綱なり。今、俗人号けて蘭の松山と云ふ。地の形体は、壠も石も並びになし。白き沙のみ積み上がり、すなはち松の林繁茂る。四の風吹く時は、沙飛び流れて、松の林を掩ひ埋む。今、年に埋みて半ばを遺す。恐るらしくは遂に埋れはてむか。松山の南の端なる美久我の林より起めて、石見と出雲と二つの國の堺なる中嶋の崎に尽る間、或るは平なる浜、或るは陵しき磯なり。

(『出雲国風土記』神門郡神門水海)

とある。柳田國男は日本海には潟が多く、その特徴として、川より運ばれてきた土砂が湾を塞いでいく形で潟が生成されていくことを説いたが、⁽²⁾ここで柳田の話は、まさにこの風土記の記述と同じで神門水海も古代の良港としての潟であり、風土記において綱に見立てられているのが柳田の言う湾を塞いでいく砂州であろう。

耕作に重きをおかなかつた海部種族などが、逐次に内陸を経略するには最も形勝の地と認めてよろしい。

(『地名の研究』)

というように、潟から潟へ海の民が移動していくことが想定されているわけで、風土記撰進の時代にもそのような自

由な行き来があつたとまでは断言できないが、潟を通じての海路が日本海地域の主たる交通幹線路であつたということが想像できるわけである。そして、海から神門水海を目指した場合、その奥には出雲郡かむなびとされる仏經山⁽²⁾が聳えており、ひとつ目の航海上の目標となり得るのである。

天然の良港である潟の神門水海を港として、古志の人々が出雲に移住した記述を見たが、松江市の北西にも古志町が残る。この古志町も越の国から人々がやつてきたという言い伝えが残つてゐるそうである。ここは先にも触れた秋鹿郡のかむなびとして挙げた佐太天神の坐す神社のある土地でもある。大神の生まれた加賀潜戸から、日本海側とのつながりに視線が行きがちだが、神社より南に目を向けると風土記中の「佐太水海」が存在する。

佐太河。源は一つあり。「東の水源は、嶋根の郡の謂はゆる多久川、是れなり。西の水源は、秋鹿の郡渡の村より出づ。」二つの水合ひて、南へ流れて佐太の水海に入る。すなはち水海の周り七里なり。「鮒あり。」水海は入海に通ふ。潮の長さ一百五十歩、広さ一十歩なり。

（『出雲國風土記』秋鹿郡佐太河）

現在、ほとんど水田となつてしまつてゐるが、まだわずかに湖が残る。古代はもっと広大であつた佐太水海の水際につたろうと考えられるのが現在の松江市古志町なのである。そして、宍道湖内からではあるが、佐太水海を目指した場合にはその背後に秋鹿郡かむなびとされる朝日山が聳えている。こちらの古志町は風土記中に記録はないが、神門郡の古志郷は現在の神西湖、古代の神門水海に接した場所であり、松江市古志町も古代の佐太水海に接している。人々が海を渡り、天然の良港である潟を通して、山近くの土地に根付く。そのような行き来を暗示させる記述であるとも考えら

れるのである。

神門水海・佐太水海だけではなく、宍道湖・中海 자체が大きな潟であり、サルガ鼻住居跡など、古くから内側の沿岸部に沿つて人々が住んでいたことがわかつていて⁽²²⁾いる。当時は現在よりもさらに宍道湖・中海とも水域が広かつたと考えられており、出雲地方全体が海の民による信仰の強い地域であったと言うこともできる。ヤマアテによつて恩恵を受ける海の民が潟のネットワークを通じて日本海を頻繁に行き来していいたとするならば、有史以前から「二上」を有する山を神の坐す山として信仰していたということ、そういった信仰も潟の港を通じて日本海沿岸に広がつていったと考えることができる。どのような種類の人々かは特定できないが、越中二上山麓に鎮座する伏木氣多神社をはじめ、主として日本海側に見られる氣多神社は、式内社では、能登・但馬・越中に見られ（但馬は幾分内陸にある）、どれも大己貴命を祭神としており、出雲地方よりの信仰が日本海沿岸を辿つて漸次北上したと考えられる。また、もうひとつの想定として『倭名類聚抄』に、

越前国大野郡海部

丹後国熊野郡海部

隱岐国海部郡海部

筑前国怡土郡海部

筑前国那珂郡海部

筑前国宗像郡海部

豊後国海部郡

と、日本海沿岸、対馬海流に沿つて海部郡や海部の地名が広がつており、こういつた二上を信仰する種族が海部系氏族であったとも考えられる。少なくとも楯縫郡のかむなびで見たように、古代祭祀の跡は五世紀のものと見られ、沖ノ島の祭祀時代とも共通する。時代的には古墳時代、各地の豪族が貿易をし古墳を築く程強大となつていた頃にはこれらの山に対する信仰があつたと言えるだろう。時代が下り『風土記』『万葉集』のまとまつた頃にはその信仰の古さだけが残り、出雲では「かむなび山」として、越中では「二上山」として人々に崇敬されていったと考えることができる。大和に四ヶ所、かむなびという名で皇孫の近き守りの為に出雲の神が神威あるものとして鎮められるに至るまでには長い時間の経過があつたと考えられる。そうすれば大和にも共通の要素を持つ二上山があるにも関わらずかむなびとして選定されなかつた理由も納得がいくのである。次に越中二上山や出雲かむなびと同じ日本海に隣接して聳える弥彦山の事例から、さらに海の民と山との関わりを見ていただきたい。

六 弥彦山の信仰

弥彦山は新潟県西蒲原郡弥彦村にあり、海沿いに聳える靈山である。『延喜式』には越後国蒲原郡の名神大として「伊夜比古神社」とある。この山も二上山、かむなび山と共通するよう二峰を持つ山である。越中二上山の段でとりあげた三八八二番歌と共に越中歌四首としてここが詠われている。大宝二年（七〇二年）三月十七日に、

分越中国四郡属越後国。

（『続日本紀』大宝二年三月十七日条）

とあり、この四郡に蒲原郡が入っていたと考えれば、この越中国四首として入っている弥彦山の歌は分国以前からの、古謡であつたということが想像できる。その弥彦山の歌というのが、

弥彦 おのれ神さび 青雲の たなびく日すら 小雨そほ降る

弥彦 神の麓に 今日らもか 鹿の伏すらむ 裳着て 角つきながら

(卷一六・三八八三)
(卷一六・三八八四)

である。藤原茂樹は「春は皮服を著て²⁴」において、国守に対する歓迎の意味としてこの越中国歌四首が詠われたことを想定し、特にこの二首に関して、

二上山は国の西部にありこれを歌いあげ、次には国の対極の東部に位置し、国府からもっとも遠くにある神々しい弥彦山を賛えるのは、眼前に坐す国守とその周囲の官人を賞賛し尽くす表出行為である。

としている。越中国歌において二上山が西部を代表する山で、東部を代表するのが弥彦山であるということは重要な指摘と考へる。その間には、高さや秀麗さ等を見ても他を圧倒する立山が存在するはずだが、ここで弥彦山が注目されていることに古代人の眼に映る神の山というものがどのようなものかが窺えるのではないか。このような想定のもとに、弥彦山の信仰をみていきたい。

まず、『万葉集』三八八三番歌にあるように「青雲のたなびく日すら小雨が降る」というのは、晴れの日でも雨が降

り易い山であると詠われているわけで、これは同じく二上を持つ筑波山にも同様な表現がある。

……男神も 許したまひ 女神も ちはひたまひて 時となく 雲居雨降る 筑波嶺を…… (卷九・一七五三)

男女二神の坐す筑波山は時を定めず雨の降る山であるわけで、そのような状況というものが神性を感じさせる条件であるのだろう。筆者が実際に弥彦山に登つてみると、麓や平野部では晴れていたのに、急に雲が海側から立ち上り始め、夏だというのに山頂が冷気に包まれたという経験がある。雨こそ降らなかつたが、海側からの風を受けて雲が立ち上り易いというのは海沿いの山の特徴とも言えるだろう。正史には、

越後国蒲原郡伊夜比古神預之名神。以彼郡每有旱疫。致雨救病也。

(『続日本後紀』天長十年(八三三)七月三日条)

とあり、やはり雨を降らす山として名神大社になつたことが記されており、現在も弥彦山南麓、寺泊町野積と弥彦村大字麓との中間地点に標高三八メートルの雨乞山という名称も残る。明治四十年頃に野積村の人々が実際に雨乞いをして、その神威が中央政権に正式に認められたのが八三三年であったことになろう。だから、おそらくこの山 자체を神聖視する信仰は越中二上山などと同様に古代文学に登場する以前からの古いことであろうと考える。

一六八八年に神道学者橋三喜⁽²⁶⁾がまとめた『伊夜日子神社記』によると、祭神は天香兒山尊（高倉下尊）で、紀州熊野

⁽²⁶⁾

より越後の米水浦にたどり着いたとされている。また、この神社の特殊神事の一つに、「御濱行」というものがあり、三月一十七日と十月二十七日に神職一同が米水浦（現在の野積浜）に赴き、海水にて禊⁽²⁷⁾をし、海藻を採つて翌月六日までそれを湯に入れて沐浴をするのだが、祭神と海との関わりの深さが窺える。また、同記には、この祭神が米水浦にたどり着いた時に、人々に操船技術や製塩法などを教えたとしている。摂社には妃神である熟穂屋姫命を祭る妻戸神社があるが、この妃神も天香兒山尊と共に生活技術を教えたとされており、現在も野積浜の人は春一番に漁獲した魚を妻戸神社背後の巨岩にお供えし、その御神徳に感謝するといふ。⁽²⁸⁾ 穀倉地帯、越後平野の雨を司る神として農業関係者に篤い信仰を受けている弥彦神社であるが、その裏にはもともと漁民達に強く信仰されていた歴史があつたのである。また、もともとこの二峰を有する弥彦山にたどりついたのは、やはり男女二神であつたとされていることも筑波山、大和二山上とも共通する点で興味深い。

筆者が弥彦山に参詣した折、漁業を営んでおられた方に話を聞いた。この弥彦山ももちろん海上でのヤマアテの対象としており（当地では「ヤマジルシ」にするという）、それによつて自位置を把握し、記憶している海底の地形から、自船の位置する海底の深さを推測していたそうである。また、そのアテの対象となる山は、弥彦はもちろん、遠くは米山まで数多く存在し、それを多く覚えていることが好漁場を多く知つてゐることにつながり、いい漁師の条件となつたが、もう一つ大事なことは、日和を読む事ができるかどうかであるという。なによりも自分の生命あつての漁であるから、シケの予測等、天氣を読むのにやはり山が重要だということである。弥彦の冲合いから米山が見えるか見えないか、弥彦山にこの雲がかかつたら荒れる等、そういった知識の為にも山が利用させていたのである。このような知識や技術

は、沿岸部のどの地域でもあるだろうが、海沿いに隣接する特異な形状の山というものは、目立つという点からだけでも漁民のいい目標であり、天氣の指標にもなり易く、漁民の守り神となつたことは想像に難くない。海沿いの山は雲が立ち上り易いことは前にも触れたが、これを活かして海の民はいち早く気象の変化を捉える為にこの山に注意を向け、その情報によつて守られてきた。越中国歌の中に、西部を象徴する山として「上山」が登場し、東部における象徴は、立山が詠まれずに弥彦山であつたということは、海の民にとって身近であつて、守り神ともなる信仰の対象となる山がこの二つであつたことを意味するのであると考える。また、弥彦山や出雲かむなび山において雨乞いの要素があつたことのもこの立地条件によるところが大きいのであろうとも思われる。

七 おわりに

これまで見てきたように、二峰を持つ山である越中「上山」や出雲かむなびなどの古代的な山に対する信仰というものは海と深く結びついている。それは、海上より海沿いに聳える山を見ることによって自位置の把握や天候の予測、雨乞い祈願など、多くの恩恵を受けてきた海の民の生活の蓄積より起きた信仰心によつて支えられていると考えられる。このような信仰は出雲かむなびや越中「上山」だけではなく、弥彦山などのように、日本海各地に存在する靈山にも共通する、いわば海路と渴とのネットワークを通じて広がつたものであつたと見ることができるのである。海の神が山の神であるという事実、それは一見矛盾しているようではあるが、沿岸部においては当然の成り行きであるとも考えられるのである。

最初に触れたように、天孫降臨条において「二上」が目指す対象であるということは、海の民ならではの視線が生み

出した一文であると考えることもできる。普段から海上において山山を見ている人々は、海の彼方から神がやつてくる場合、その神も自分たちと同じ方法で山に辿り着くと考えるのは当然だろう。近藤氏が指摘された「二上山」に対する祖先神的性格があるという要素も、二上という形状にそれぞれ夫婦神や親子神を想像するというだけでなく、弥彦山の縁起にあつたように神が海よりこの特徴的な山を目指してやつてきたという伝承の裏に、その土地に根付いた祖先が「二上山」を目標にたどり着いたという歴史があつたがゆえと考えることもできるのではないか。

天孫降臨条には、天から山へとする垂直方向の神来臨の方向性が見て取れるが「二上」という語に注目すると、海の彼方から山に辿り着くという形の水平方向の神来臨の図式が浮かび上がつてくる。いわば海の民による伝承が重なり合つてこの条を形成しているとも見られるのである。藤原茂樹は「天孫降臨伝承の検討」⁽²⁹⁾において、天孫降臨条を詳しく検討し「笠狭の嶺」の来臨方式の混淆から、

海の間近く面した山や海上から遠くはつきりと眺められる山に神が宿る観念は高天原の成立を待つ以前から海上生活者や航海者とともに歩みだしていたことを想定すべきではないだろうか。その意味において海山からの来臨は降臨神話を待たずともありえたに違いない。『笠狭の嶺』⁽²⁹⁾にみる海山来臨の混淆はそのような事情のもとに成り立つてゐることを考えるべきである。

と結論付けている。神来臨の形式の混淆を考察していくにあたって、垂直方向、水平方向それに関わる要素が何であるかということを整理しておく必要はあるだろう。今回は「二上」について見たわけであるが、水平方向の神来臨の

方向性というものは、他にも要素がある。九州から沖縄にかけては、神が上陸する際の足がかりとなる「立神」が信仰されているが、南島だけでなく、本土にもこのような海際の巨岩が信仰されている例が散見される。また出雲地方において、海上から神が依る例も多くまだ考察し切れていない部分が多い。今回は「海神山神論の計劃」を出発点として、水平方向の神来臨の要素として「二上」に関わる信仰を特に日本海側に絞って考察したが、沖縄や九州、太平洋側といったものの信仰についても別稿において考えたい。

注

- (1) 寺川眞知夫「天浮橋の構造と機能」「萬葉」第一六八号 平成十一年三月、井手至「天孫降臨神話「於天浮橋字岐土摩理蘇理多々斯」考」「萬葉」第一六九号 平成十一年四月
- (2) 椎野禎文「天孫降臨の峯——ソの峯からクシフル峯へ」「東アジアの古代文化」第一〇一號 平成十一年十一月
- (3) 松本信弘「稻・舟・祭」^ヘ松本信廣先生追悼論文集・六興出版 昭和五十七年九月 所収
- (4) 近藤健史「万葉集における二上山の歌——その基層と周辺」「語文」第九十一輯 森淳司先生古稀記念号 日本大学国文学会 平成七年三月
- (5) 池田弥三郎「かむなび私考」「わが師・わが学」昭和四十二年四月 桜楓社
- (6) 宮澤明久「神奈備山とその祭祀」「風土記の考古学」③ 同成社 平成七年十一月
- (7) 吉井巌「佐太太神——古代出雲における太陽信仰」「帝塚山学院大学研究論集」第5集 昭和四十五年十一月
- (8) 三品彰英「天ノ日矛の伝説——神功皇后伝説考その一」「日本書紀研究第三冊」壇書房 昭和四十三年十一月
- (9) 永留久恵「海神と天神——対馬の風土と神々」白水社 昭和六十三年四月
- (10) 鹿島町、青山マン氏よりの聞き取りによる。
- (11) 前出「風土記の考古学」所収

- (12) 『宗像沖ノ島』第三次沖ノ島學術調査隊 吉川弘文館 昭和五十四年五月
- (13) 潧音能之『古代出雲と風土記世界』河出書房新社 平成十年九月
- (14) 前出『かむなび私考』
- (15) 德岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨易「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』第三六号 日本地質学会 平成二年十一月
- (16) 藤田富士夫「日本海文化の國際性——日本海沿岸」『日本の古代2 列島の地域文化』森浩一編 中央公論社 昭和六年二月
- (17) 「富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告」富山市教育委員会編 昭和四十九年
- (18) 森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえての交流』大林太良編 中央公論社 昭和六十一年四月
- (19) 竹中邦香「越中遊覽志」言叢社 昭和五十八年
- (20) 柳田国男「新潟および横須賀」「地名の研究」古今書院(定本第二十巻所収) 昭和十一年一月
- (21) 『島根県の地名』日本歴史地名大系 第三十三巻 平凡社 平成七年七月
- (22) 前出『島根県の地名』など
- (23) 前出「中海・宍道湖の地史と環境変化」
- (24) 上野誠・大石泰夫編『万葉民俗学を学ぶ人のために』世界思想社 平成十五年十月
- (25) 『弥彦村誌』弥彦村誌編纂委員会 昭和四十六年六月
- (26) 『弥彦神社叢書』国幣中社弥彦神社社務所 昭和十八年所収
- (27) 高橋吉雄「弥彦山周辺の史蹟と伝説」昭和四十七年七月
- (28) 寺泊町、深瀧芳夫氏よりの聞き取りによる。
- (29) 藤原茂樹「天孫降臨伝承の検討」井口樹生編『芸文伝承研究』池田彌三郎先生十年祭記念論文集 小集楽 平成四年七月